

## フランシス・ポンジュ研究

### “Pour un Malherbe” を読む (IV)

内 田 洋

テキストⅣ：1953年10月3日から6日まで

プレイヤッド叢書のポンジュ作品全集2巻(注1)が刊行されたことは、われわれの研究条件に大きな変化を生じたことは言うまでもない。第2巻冒頭に収録されている *Pour un Malherbe* のテキストは、少なくともいま読もうとしているテキストⅣおよびⅤに関する限り、異同はない。たとえば、Ⅴに引用されているマレルブの作品「デュ・ペリエ殿を慰める詩 その息女の死に臨んで」(CONSOLATION À MONSIEUR DU PÉRIER, SUR LA MORT DE SA FILLE) は、ポンジュが第1～7節を引くと注記していながら、実際には第17～21節をも引用しているという、一種の錯誤をそのままにし、1965年の初版本をほぼ忠実に再現している。しかし新たに *Dans l'atelier de «Pour un Malherbe»* と題して、6種の未刊行資料(手書きあるいはタイプされた覚書、注釈、草稿など)が添えられていて、それ自体は興味深い、いずれも1955年(マレルブ生誕400年)以降のもので、いまここでの読解作業には直接関係しない。また巻末には、ベルナール・ブニョによる Notice と、引用されたマレルブ作品の一覧表(三種の刊本におけるページを参照させつつ)、ポンジュの本文中に現れる多くの人名リストと解説 *Notules biographiques des personnages cités* があって、特に16～17世紀の人物の概略を知るに便利だが、選択がかなり恣意的で、サント・ブーヴやロートレアモンの名が見当たらない。最も重要なのは、これもブニョによる *Notes sur le texte* であって、ここにはまず、家族の手元に残された遺稿、メモ、参考資料などについての言及 *Le dossier des archives familiales* と、ポンジュがみずから選択・編集して雑誌類に発表した断篇についての記述 *Les préoriginales* が置かれたあと、本来の注釈がつづく。それがどこまでわれわれの読解過程の疑問に答えてくれるだろうか。

アンリ・カレの斡旋によってアメリカのラジオ局から、放送大学講座の台本を書いてほしいという注文を受けたという10月3日の記述から始まるこのテキスト。しかしプレイヤッド版全集の年譜にも、本文注釈にも、その経緯や結末など、ほとんど何の記述もないと言ってよい。ただ、1953年10月3日付で転写された部分を含む、10月12日付の一枚の紙片が残されており、それに人名リストがあって次のようにタイプされているらしい。“マレルブ - 私: ロンサール (アンリ・カレ) ”、金額(25,000フラン)と次の指示あり。“ア

リカ（大学ネットワーク）のために。出演者4名、解説30分、詩篇朗読13分”。はたしてこれは実際にフランス語のまま放送されたのか、英語訳となったのか不明だ。とにかくタイプ原稿で20頁、ナレーションとスキットを半々にという注文だった。3日後の10月6日には、一気に全体構想が書きつけられる。第一に、マレルブの仕事の重要さは、《世界で最も固い中核となった一時期》のフランス（1615年~1815年）の中核部を、リシュリュールとともに形成したことにあると捉えること。そのとき、マレルブはいわば冶金術士として、《烈しく燃え盛る炎の真直中に、あらゆる方面から時代と党派が持ちきたった鉱石をすべて熔融し、最も硬い金属を得る》ために、最重要の役割を果たしたのだ。冶金工にして「父」の地位を占める人物。これはすでにわれわれの聞き慣れた、ポンジュにとっての最上の格付けだということができる。したがって、書かれるべきテキストは歴史劇の一場面であり、ルネサンスとルイ十四世時代の間にはさまれた、《強固で武骨できまじめな一時代》の、質素な服装をしたひとりの貴族=武人の生涯を、そこに生き生きと描出することになるだろう。

注文原稿を書き出す前の準備体操のようなこのテキストで、われわれの関心を強く惹きつけるのは次の一節である。

彼は万人に理解されることを望む。彼は滑稽なことを嗅ぎわかるセンスがある。詩の異様な装いを除去する（そのために散文的に無味乾燥ときめつけられている）。

彼は自分に抽象的な問題を課することがない。

これは偉大な精神だ、幻想をもたない精神なのだから。己の相対的な優越性と絶対的な挫折とを知っている。

彼はある種の文学の修練がどんな権能に相当するかを知っているゆえに、詩をつくることを選ぶ（詩をそういうものにする）。時間的かつ非時間的な権能。まさしく Verbe（ロゴス）のそれだ。そして勿論、彼が（そしてまたわれわれが）関心を寄せるのは、一般に理解されている意味での「詩」（ポエジー）ではなく、むしろ「ことば」（パロール）なのだ。  
(PM, p.96)

言い換えるなら、ポンジュのマレルブに対する執着は、その詩業の成果というよりも、詩人たるものの言語に対する関係のあるべき姿、その使命に関して模範的であって、いわば創業者としての功績を認められるべきだということなのだ。勿論、それはフランス王家の下での絶対的な中央集国家の体制構築という政治的な事業と、同等な意味をもつものとして捉えられている。そしてその創業者の姿勢とは、絶対への到達などという《幻想をもたない》で、現実的な問題において相対的な成功を収めることによってこそ、己の優越を確信できるように対処することに存する。それは限りなく散文精神と相接するが、その精神こそ、デカルトに45歳も先行するマレルブが、後世のモンテスキューとともにフラン

スという《家の基礎を固め、築きあげ、設備をととのえ、中庭を舗装》したというのだ。要するに《秩序ある住まい、同じく整然たる庭園。足音の鳴り響く部屋部屋。三次元をそなえた抽象的な詩》。ポンジュはデカルトの思想的淵源にマレルブが存在するのではないかとさえ暗に示唆してさえいる。詩人マレルブにとって

だがこの理性 (*raison*) とは、より正確に言えば響鳴 (*réson*)、つまり緊張感のあることばの、極度に弦を張り締めた堅琴の、共鳴 (*résonnement*) でなくして何だろう。

(PM, p.97)

そして単に判断力をもつことにとどまらない、この響鳴としての理性 (*raison=réson*) という定式は、必ずしもポンジュの独創になるものではないにしても (注3)、彼の「マレルブ論」の主要テーマであることが著者自身によってやがて明言されることになる (注4)。高らかに鳴り響く理性のことばをこそ、という (少なくともロマン主義以後は) 特異な詩の概念を、ポンジュはマレルブに託して語ろうとしているのだ。それは政治的な事業と不可分な行為であり、マレルブとリシュリユーを放送台本の主要人物とする予定をポンジュは書きつける。《1628年3月15日付、リシュリユーのマレルブ宛書簡》を参照している。さらに、スキットに再現すべき重要シーンとして、アンリ四世やマリー・ド・メディシスとの出会い、とりわけ《ラ・ロシェル降伏の際のリシュリユーとの最終シーン》を予想している。

ボワロベールがそこでリシュリユーにマレルブの死を知らせる。リシュリユーはいくつかの決断をする。(《この包囲戦は私に多くのことを教えたといえるだろう》、等々)、とりわけ、初めて海軍の創設 (プレストとツーロン) を、同時にアカデミー・フランセーズの創設を思い着くだろう。

(PM, p.98)

しかし基調は、《フランス史の最も混乱した一時代》に秩序を希求した、冷静かつ熱情あふれる人物の生涯の物語である。《穏やかな威厳と確信と揺るぎなさの印象》、それをポンジュはヨハン=セバスティアン・バッハの音楽の印象にかなり近いと記している。

## 注

1 Francis Ponge, *OEuvres complètes I, II*, édition publiée sous la direction de Bernard Beugnot (Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1999, 2002). 以後は PL, tome I, tome II と略記する。

2 PL, tome II, p.1478-1479.

3 ベルナール・ブニョによれば、この言語遊戯的定式は Paul Claudel, *Journal* (Bibl. de la Pléiade, t.I, p.756) と、Paul Éluard, Préface à la *Première anthologie vivante de la poésie du passé* (Seghers, 1951) にも見られるという。特に後者からの影響の可能性は高いが、ポンジュは既に 1925～26 年に書いた詩編 "LE JEUNE ARBRE"の中で「Poète vêtu comme un arbre/ Parle, parle contre le vent/ Auteur d'un fort *résonnement*」と詠っている。Cf. PL, tome II, p.1478.

4 «Entretiens de Francis Ponge avec Ghislain Sartoris», *Po&sie*, 26, 1983, p.98.

## テキストV：マレルブ-ラジオ U.S.

末尾に1953年10月12日と日付があり、一週間足らずで書き上げられたと推定されるこのテキストVは、『カイエ・デュ・シュッド』誌のために書かれたテキストII（注1）と並んで、めずらしく一応の完成をみた、決定稿と見なしうる一篇だ。その完成が、単に注文制作の時間的・内容的・分量的な制約が可能にしたある種の飽和状態にすぎなかったにせよである。前記のごとく、ナレーションとスキットから成り、それに十四篇のマレルブ作品からの抜粋が挿入されている。ポンジュの引用の原典はベルナール・ブニョによれば二種類あるが（注2）、両版の間の異同の有無は不明だ。ただ、『マレルブ論』初版においてと同じく、プレイヤッド版106ページに引用された「聖ピエールの涙」からの抜粋を、ポンジュは第31節、第33節としているが、おそらくこれは彼の錯誤であって、アントワーヌ・アダン校訂によるプレイヤッド版マレルブ作品集（注3）によれば、これは第32節と第34節でなければならない。

ナレーションにおける歴史叙述に、新しい要素が加わっているだろうか。まずマレルブの生まれた時代のノルマンディが、百年戦争後の荒廃から急速に立ち直り、学芸の活発なエネルギーな一時期にあったことを、比較的詳細に語っている。イタリア人ランフラン（カンのサン・テティエンヌ修道院長、カンタベリー大司教）からアラン・シャルティエやヴォ克蘭・ド・ラ・フレネーにいたるノルマンディ文化の土壌に言及し、より直接にマレルブの教養を培った人物たちとして、雄弁家でラテン詩人のジャン・ルーセル、偉大な医師ジャン・ド・カエーニュほかの名を挙げている。青年マレルブの精神形成に影響を与えたもう一つの重大な事件として、宗教改革の進展と新教・旧教両派の戦争があったことは言うまでもない。ポンジュによれば、《いくつかの証言は、彼があらゆる機会を捉えて、当時いたるところで戦っていた貴族部隊を攻撃目標とするゲリラ活動に参加する姿を示している》というのだが、その証言の出典は不明だ（注4）。

若年のマレルブのいかなる肖像も残っていないという理由で、アンリ四世に接見し宮廷生活が始まった五十歳以後の容貌・体躯その他の外面的描写は、ほとんどラカン（マレルブの弟子で、師匠の『回想録』*Mémoires*を残している。1589-1670年）のことばの引用に限られており、ポンジュはもっぱらマレルブの精神的・内面的肖像を提示することに専念している。

### <エクス・アン・プロヴァンス時代>

《二十一歳のとき、マレルブがどんな経緯で、なぜカンからパリに出て、アングレーム伯アンリの身边に侍ることになったのか、依然として不確かだ》という。この点に関するポンジュのあらゆる調査・研究は成果がなかったわけだ。とにかく現フランス国王アンリ三世（1574-1589）の異母兄弟でプロヴァンス総督たるこの人物に従い、その任地マルセイユからエクスに赴いたマレルブは、その宮廷の文芸の集い（セナークル）で、《彼が後に

ルーヴル宮殿で演ずることになる役割を実地に経験した》。その役割のひとつに、主君の情欲の対象となった婦人（しばしば既婚の）に捧げる恋愛詩を、代作するという仕事が当然含まれるわけだが、その一例として「プロヴァンスの一貴婦人に捧げるスタンス」から抜粋された四節が引用されている。《時はよき経験をつんだ癒し手。／その薬効は遅くはあるが確かに効く…／いつの日か美しいそなたを見ずにすごせるようにしよう。／その時こそ私の怨みははれるだろう…／わが苦しみをあやまたず思い起こして／そのときはただ悲嘆をおぼえるほどではなく／私はこう言うだろう、「昔はこの女も美しかった／今とは違い、おれもかつては馬鹿だった」と》。ブニョによれば、ラランヌの版でこの作品を読んだポンジュは、そこにこう注記している。《マレルブは王のために書くことで王に奉仕する、しかし王の信頼を用いて王の行動を抑制し、自分に可能な限りで平和を確保しようとしているのだ》（注5）と。マレルブは権力者に盲従する宮廷詩人ではない、理性をもって自己の情念を治めよと示唆しているのだ。しかしこのノートはテキストに生かされることなくおわる。それはむしろ、最初のスキット、プロヴァンスの宮廷での最良の友人フランソワ・デュペリエと主君アンリを交えた、巧妙に想像された場面のなかでもっと効果的に表現されている。《彼の批評は主君そのひとをも一切容赦することなく、完璧な炯眼を示すものであった》と前置きして、「聖ピエールの涙」を推敲しているマレルブをデュペリエが訪ねるシーン。

デュペリエ——（…）君には何ひとつ、これでおしまい、十分に磨きがかかったということがないんだね。しかし、先夜われわれに聴かせてくれたあの数節は、また磨き直す必要があるとは君もいわないだろうな。わたしはまだ覚えているよ。（暗唱する）

#### 聖ピエールの涙（第32、34節）

.....

暴虐の手に殺戮された幼な子の  
無垢な一群がなんと羨ましいことか、  
朝が来て短い晴れた一日を彼らは見た。  
彼らをあやめた剣は彼らへのむしろ恵みだ、  
たとえ彼らに善をなす間がなかったにせよ  
悪をなす間ももたなかった。

.....

凶刃が抜き取った鮮紅色を  
彼らの胸の白に交えた、  
それは自然に優る美しい百合。  
彼らは一冬の騒乱と嵐とが

その繊細な膚を汚さぬさきに  
永遠の春 花開くべく逝ったのだ。

マレルブ——まあね…うん、このストロップにはたぶん、変更すべきことはもうあまりない…しかしこの作品がわたしをどれほど呻吟させるか、君は想像できないだろう。主題は確かに立派なものだが、わたしはイタリア語を猿真似するわけにはいかない。フランス語で韻を踏み、フランス語で考える必要があるんだ、やれやれ！つまりわたしはフランス的理性を推敲しているのさ。

(PM, p.105-106)

元々、イタリアの詩人 Luigi Tansillo の 1560 年の同題作品（刊行は 1585 年）をパラフレーズし書き直したこの 400 行近いスタンスを、マレルブはやがて 1587 年にパリに出た折、アンリ三世に献呈して褒賞金を得るのだが、長編詩の中からポンジュがこの二節を選び出して、作者自身にほぼ完璧と言わせている点が興味深い（実際には、作者は 1607 年に、この若年の作品をばつさりと否定してしまうのだが）。同時にこの詩文の推敲を、《フランス的理性》の鍛錬と同視している点に注目したい。韻文ではあっても、マレルブの詩は理性を最高度に緊張させるところに成立する。ポンジュはそれを《高次の理性》(la Raison à plus haut prix) と呼び、この詩の注釈をポンジュはテキスト VI においてさらに展開することになるだろう (PM, p.232 -239 Examen des «Larmes de Saint Pierre»を参照)。その意味で詩は散文精神と矛盾するものではない。

スキットはこの後、デュペリエの作ったと称するソネを一読して、たちまちそれが実はアンリ・ダングレームその人の作であることをマレルブが見破るという展開。切齒扼腕の態で主君が退散すると、彼は笑いながら言う、《先日、殿の別の作品のひとつについて、こう申し上げたのだよ。殿、これは殿のお作の中から削除なされよ。完璧を欠く作物を世に出すことは、国王のご令息にふさわしからぬことです、とね。》

詩人の庇護者アンリは、パリに出た詩人の留守中、人妻への恋慕からその夫との口論の末に非業の死を遂げる（1587 年）。それはフランス全土に深刻な紛争が広がる時代でもあって、ギュイーズ公を盟主とする神聖同盟の結成（1576）、パリにおけるバリケード事件（1588）、プロワ城でのギュイーズ公暗殺事件、さらに新教派の首領たるナヴァール王アンリ（後のフランス国王アンリ四世）との和解、狂信的な修道僧ジャック・クレマンによるアンリ三世暗殺（1589）と、事態はめまぐるしく混乱し、推移する。

故郷カンに戻ったマレルブは、ノルマンディ総督となったモンパンシエ公とその求婚相手カトリーヌ・ド・ナヴァール（国王アンリ四世の妹）のために、公爵の代理として書くのだ、《あのみごとなスタンス》（とポンジュは書いている）を。その抜粋された四節は、既にしばしば先行テキストにも引用されてきたもので、ポンジュの愛着の程がうかがえる。

《…偉大なる人々に輝く星は 　むなしくも／わが頭上にありあまる幸運と力とを注いだもの  
 のだ／わが望みのもののためには何の力も授けずに。／だがそれを欲しなければならぬ  
 むしろ覚悟したほうがいい／地上の企てに安穩に与するよりも／天空を渴望して雷に撃た  
 れることを…。こうした宮廷詩人の代作を、現代のわれわれはいかにも屈辱的なものに見  
 るのだが、文芸は私的な活動ではなく公的な（さらにはすぐれて政治的な）事業、いわば  
 「ハレ」の、「まつりごと」であったことをいまさらのように思うのだ。主君の婚姻そのも  
 のが政治の一環であったわけだし、相手の一貴婦人を讃えて《美しい空》と呼び、《わが死  
 の悲しみも勝利の悦びもそこに摘む唯一の大地》と呼ぶ比喻を、ただ大仰な虚しい装飾と  
 読みとばすのは、現代の偏見というべきだろう。文字通り主君になり代わって、詩人はそ  
 の地位を篡奪せんばかりに、美女に、いや「美」の理念に到達せんとして、烈しい欲望に  
 身を焼くのだ。そして《…かくも高い棕櫚の梢のみごとな果実に／欲望をそそられては危  
 険を忘れる》。

#### ＜アンリ四世の宮廷詩人＞

新教の信仰を放棄することを宣誓して、ナヴァール王アンリ三世はパリに入城し、フラ  
 ンス国王アンリ四世（1589-1610）となった。信仰上の転向がいかにしてそれが可能であ  
 ったか、いやむしろ宗教戦争を終焉させ、国内を平定するためにいかに必要不可避であ  
 ったかをポンジュは問わないし、われわれがここで追求する問題でもない。因みに、マレルブ  
 もポンジュもプロテスタントの家族に生まれ育った人だ。年譜によれば、その間、1586年  
 から1605年まで、マレルブは故郷カンと妻や家族のいるプロヴァンスの間を往来し、息子  
 や親族の死や誕生を経験している。たとえばカンに戻った当日、ペストが猛威を振るって  
 いたこの町で義兄弟を奪われたばかりか、カンに残っていた8歳の娘ジュルダニーをもペ  
 ストで失うのだが、《哀れな詩人は全力で子供を救おうと戦った、しかし娘は間もなく彼の  
 腕の中で死ぬ…この新たな試練は、マレルブにきっぱりとノルマンディを去る決心をさせ  
 るに十分だった》。そしてポンジュが引用するのは、エックスに戻ってから、五歳の幼い娘  
 を失ったばかりの友人デュ・ペリエのために書いた詩篇だ。《彼はまったく自分の性分であ  
 る一種の慎ましきから、自分自身のためには書けなかったことを、友のために書いたのだ》  
 とポンジュは記している。

#### デュ・ペリエ殿を慰める詩

その息女の死に臨んで（第1～7節、第17～21節）

君の苦悩は、デュ・ペリエよ、永遠につづくのですか、  
 　　父たるものの愛情が  
 君の精神にふきこむあの哀しい口説きに  
 　　苦悩はいやまし止まぬのですか？



なんぴとも避けられぬ死の途を経て  
墓に下りし娘御の不幸、  
それは君の理性がさまよい、己を見失う  
迷宮だとでも言うのですか？

私は知っている、幼き日の彼女の愛くるしさを、  
だから私は、無礼な友人然として  
君の苦痛を、その軽視をもって  
軽くしようとはしなかった。

だが彼女は、最も美しい事物が  
最悪の運命を負う世にあった。  
薔薇色に彼女は生きた、薔薇の生きる  
一朝の夢を。

もし君の願いの通りに、彼女がその生涯を  
全うし得て  
白髪になって終えたとしたら、  
一体どうなっていたでしょう？

老齡の彼女の方が、天上の家にはもっと  
歓迎されたいと思うのですか？  
それとも彼女が、塵や柩の蛆虫を  
さほど不吉に感じなかったと？

いいや、わがデュ・ペリエよ、「運命」が  
魂を肉体から奪う途端に、  
年齢は小舟の手前で消え失せて、  
死者について来はしない。

.....

私も、既に二度、同様の雷撃に  
身を碎かれる憂き目を見、  
そのつど理性がよく私の心を解きほぐした、  
だからもう思い出すこともない。

かくも愛しき者を大地に奪われたことを  
私とて嘆かぬではない。  
だが癒す手だてをつゆ持たぬ偶有事に  
癒しを求めてはならぬ。

死は他の何物にも似ぬ苛酷さをもち、  
人の祈りも通じない、  
残酷な女のように耳を塞いで  
われわれを泣くに任せる。

藁屋根に護られながら、その小屋で貧者は  
死の掟に逆らえない。  
ルーヴルの柵を見張る衛兵もわれらの王を  
死から護ることはない。

耐えきれず、死に不平を洩らすのは  
時宜に適ったことではない。  
神の欲するところを欲する、これこそ唯一  
われわれを安んじる知恵。

(PM, p.112-113)

ポンジュが《かかる詩の美、この語調の崇高さ》に感動しないものはない、と断言するのもうなづける。行分けされ、韻を踏んだ散文といてもいいものであるにもかかわらず、これは紛れもなく詩であろう。既にノルマンディとプロヴァンスで著しい名声を得ていたマレルブに、やがて大きな転機が訪れる。

1600年に国王はイタリアのマリー・ド・メディシスと結婚することとなり、宮廷全体がリヨンにまで花嫁を迎えに出た。当時エックスにいたマレルブが、マリーに拝謁し、リヨンでの国王の祝宴の席で彼は友人たちから依頼された「オード」を朗読する。その場面はマレルブの生涯の決定的な瞬間であって、ポンジュがこれをスキットに仕立てていることは言うまでもない。その時に、マレルブを国王に紹介したデュ・ペロン枢機卿（1556-1618. カトリックに改宗したプロテスタントの人文主義者、神学者で当時の一流の詩人と目された）の有名なことばを、ポンジュはそのまま用いている。《陛下、私はまったく詩作を捨てました。それにプロヴァンスに住み慣れ、名をマレルブと申すノルマンディの一貴族以後は、なんぴともはや詩に手出しはなりません。》

アンリ四世とマレルブの、これが最初の出会いで、《彼（マレルブ）は陛下が王国を作り

直されたように、われらの言語を創り直しましょう》というデュ・ペロンのことばを王は忘れなかったが、マレルブを宮廷に招致するようにとのデ・ジヴトーのしばしばの進言にもかかわらず、主として新しい年金の負担の生じることを慮った王は、ようやく五年後の1605年に詩人を召しかかえた。

この一節に来て、ポンジュは《このテキストの多くの箇所では若干の表現、ときには一節全体が、主にラカンやタルマン・デ・レオーその他の著書から借用されている》と、わざわざ注記しているが、《この》テキストという限定がどこからどこまでを指すのか、以下、作品の末尾までなのか、曖昧ではある。ラカン(1589-1670)は、詩人がしばらく主馬の頭ベルガルド公家に預かりの身となった折に知り合った十七歳の頃から師事し、終生彼を父と慕った、その『回想録』*Mémoires*、後者の場合はその『逸話集』*Historiettes* (1854年の刊本で、ポンジュはこれをパスカル・ピアから借りたらしい)が典拠なのだろう。

リムーザン地方鎮圧のための王の出陣の詩を書くよう命じられて書いた作品が引用されたあと(《戦争の恐怖におののく民衆は／踊るためでもなければ もう太鼓を鳴らすまい》——為政者の偉業の顕揚と荘厳化こそ、この時代の詩人の枢要な政治的機能なのだ)、有名な『デポルト注釈』が書かれる機縁となったエピソードが語られる。当時、第一級の詩人と見なされていたデポルトに、あなたの作品よりも《このポタージュの方がまし》と言い放って多くの敵対者をみずからつくったマレルブは、デポルトの作品の注釈と添削を後世に残した。《会話の中での辛辣な警句のほかには、彼がけっして定式化することのなかった詩論の要諦がそこに見られる》とポンジュは言い、自身の作品にも常に加筆推敲することで、マレルブは《ただジャンルの模範例、その典型見本をつくることしか望んでいないように見える》としている。

まさにそれこそ、自分自身の名においてと同じ完璧さで、いやおそらくそれ以上に完璧に、だれか別人の名において自己を表現するという、その比類ない能力を説明するものだ。たとえば王になりかわって、その恋の情熱に奉仕するのだ。(PM, p.117)

コンデ公と婚約したシャルロット・ド・モンモランシーに烈しい愛欲の炎を燃やした、当時53歳のアンリ大王(恋の相手は16歳そこそこ!)、《若者なら犯したかもしれないあらゆる狂態を演じた》アルカンドルのために、つまりは王に代わって、幾篇もの詩を書いた。

なんと多くの棘が、愛よ、おまえの薔薇にはあることか！  
 盲目の心を迷わせ、おまえは運命の命ずるままに  
     ありとあらゆることをさせる！  
 おまえの咲き栄える裡にも人が吐息を洩らすも道理！

おまえの支配の下に生きることのなんという難しさ  
死を望むこともなしに！ (注6)

(PM, p.120)

コンデ公とともにブリュッセルにのがれたシャルロットは、王妃の地位に誘惑されてか、離婚要求書に署名する。王はさらに激情に身を任せ、彼女の父モンモランシー元帥に5万の部下を貸してまで、フランドルからその娘を迎えようとする。だが厳しい婚姻の法を、王といえども侵すことはできない。《…かの法が／これほどの支配力をもって君臨するとは／もし天がその法を解消し給わねば／わが望みを満たすべき／万能の力もただ無にひとしい／…／私は生きることをやめねばならない／もし苦しむことをよそうとするなら》と嘆く。これらは詩人自身の経験した愛の情念の苦悩から生まれた表現には違いないだろうが、一面では、国王の迷妄をまざまざと言い表し、権力者の力を超える至上の法の遵守を、それだけ厳格に要求している作品だと解釈することもできよう。

奇しくも、その数週間後にアンリ大王は暗殺される。王妃マリーが摂政の地位に就く(1610-1621)が、マレルブの座は揺らぐことなく、むしろ年金が1500リーヴルに加増されたという。「新王の母なる女王に 摂政のめでたき成果について」と題する作品の末尾では《ほんの三人あるいは四人／その中に私もいるが 彼らのみ／永遠に朽ちることなき／称賛の詩をなしうる》と豪語している。自己の才能について極めて明確な自覚をもち、しかも後世がその判断を完全に是認したとは驚くべきこと、とポンジュは書く。

#### <新たな紛争の中で リシュリユーの出現まで>

宮廷では陰謀と革命、地方では内乱の火が広がる、混乱の14年があり、王母が摂政の座から降ろされた後の3年間は母子の間でさえ争いがあった。ポンジュによれば、この時期のマレルブの詩的活動を二分できる。《第一に、ルイ十三世とアンヌ・ドートリッシュの結婚を祝賀する詩と、その折に催された祝宴に添えるべく書かれた諸篇。第二は、彼自身のために、オシー子爵夫人やランブイエ公爵夫人に宛てて書かれた恋愛詩》だ。政務に関しては非常に用心深く、事情に精通していたので、身の処し方について判断を誤ることがなかった。《マレルブの主要な関心は、党派間の抗争を超えて、みずからの引き受けた大臣職、フランス語を宰領するという職務を保持することにほかならなかった》し、それは家族との別居もやむなしとした彼の、宮廷での《唯一の存在理由》でもあった。

ここでポンジュは、パリで質素な生活に甘んじながらも家族の世話と送金を怠らない、節操ある家父としてのマレルブを描いている。一方ではまた、サロンに足繁く通い、一世を風靡する女性たちに熱心に言い寄る、熱しやすく、誇り高い、ぶっきらぼうな気質のまま女性に好かれる偉丈夫だった、とも。彼の恋愛の相手もまた型どおりに彼のひとりのミューズであって、彼女を誉め讃え、奉仕しようとした。《オシー子爵夫人に対して、彼は恋

い焦がれる男の立場をとったが、彼女を称賛して書いた詩句が、どれほどにただ「美の賛歌」とだけ題することもできたものか》に注目すべきだ、とポンジュは指摘する。確かに、カリスト（最も美しきもの、の意）と渾名された彼女に献じられたソネットの冒頭、《カリストが美しいほどに美しい何物もない／それは自然が全力を尽くしてなした作品だ》とか、《そのことばと声とが死者をも蘇らせ／芸術はその天性の優美につゆ及ばぬ》といった詩句の抽象性は明らかで、文芸の自己言及性をも見てとれる。とりわけ末尾の三行詩、《この限りない優雅と色香の裡にある人を／わが理性よ、可能だと思うのか／判断力をもちながら崇めないなどということが？》の理屈っぽさには、美的判断力と純粹理性の乖離を懸念する気配がない。王侯の情欲の狂態をつぶさに見てきた詩人が、自分自身のために書いた《恋愛詩》が、このようなものなのだ。

文学史上有名なサロンの女主人、ランブイエ夫人に献じた諸篇から引用された「断章」は、ラカン宛て書簡から抽出されたものだ。

### 断章

さて今 この傾きゆく齢にあつて  
 私のほの暗い理性の光も日没間近、  
 ヘレネーがこの世に立ち戻って、パリスの知る彼女の  
 あの栄光に包まれた身の色香を  
 あらゆる者に崇めさせるのを見るだろう時、  
 私が一顧だにされなければ、私は彼女を愛しはすまい。  
 かの美しき牧羊女、運命はどうやら私に  
 晩年の幾年かを彼女のために残してくれた。  
 彼女の得た完璧なあらゆる希有の財宝は  
 精神を飾り、またその肉体を愛せしめる。  
 それは人を惹きつけ、人を魅了しやまなかつた。  
 彼女を一瞥した途端、私は武器を投げ出した、  
 かくも強力な相手が私の理性を震撼させた、  
 彼女のものとなりたかつた、その牢獄に囚われたかつた、  
 力を尽くして彼女のお気に入ろうとした、  
 わが隷従がその報いを期待するかぎり。  
 だが私は気づいたのだ、もしそのまま私が  
 深追いをしていたら陥つただろう確かな危険に。  
 救済への顧慮が私に彼女への想いを捨てさせた。  
 氷のように冷えた心に身を焼く己を恥じた、

彼女に哀れんでもらおうと己を苦しめることなく  
愛欲を友情のことばに限ったのだ。

(PM, p.124-125)

《ラシーヌの最良の場面と同等に響きよい、そしてまた——フランスで初めて——秩序と精神の高さと調和の模範たるこのような語調が、歴史の最も混乱した一時代に高らかに鳴りわたったということは、驚嘆すべきことではないか。精神も風俗も、一切がてんでんばらばらで、ただひとりの詩人の理性と趣味の中でしか、未だなにひとつ固まっていなかった時代に。》このポンジュの評言を誇張と言うべきだろうか。

リシュリユー枢機卿がルイ十三世治下の宰相として登場して、わずか四年後には、マレルブはこの世を去る。この強力な政治的指導者は、《ひとりの孤独な天才によって小部屋の中で構想された、かかる精神の範型》(modèles d'esprit)を、いわば《型枠》(conformateurs)の役に立つと感じていた。それは全く疑いのないことだとポンジュは断言する。リシュリユーの宮廷詩人に対するそうした評価の仕方を、ポンジュは最後のスキットにおいて、枢機卿その人の口に語らせている。ラ・ロシェル攻略中にマレルブの訃報が彼にもたらされるというこの最終場面は、《予想されるシーン》として最初から構想されていたものだった(注7)。計画ではイヴランド(彼はマレルブの臨終に立ち会い、その死をボワロベールに伝えた)とマリー・ド・メディシスも登場させるはずだったが、実際にはリシュリユーとボワロベールだけの対話になっている。そこではリシュリユーが、詩人の最近作「ラ・ロシェルの反逆を討伐に赴く王のために」を書写させ、抜粋を朗読するという設定になっている。前年(1627)に息子マルク・アントワーヌを決闘で失った詩人の精神は、その悲しみにもかかわらず一層力を漲らせるばかりだと賛嘆し、《彼がこれほど美しい作品を書いたことはかつてないほどだ…彼の力強い、真実な語り口がどんなものか、聴きたまえ》というリシュリユー。これはあくまで政治的指導者としての枢機卿の観点からの賛辞であって、そのままポンジュの評価とは思えない。ここには二節(第10、35節)だけを引用しておく。

彼らの期待も企ても彼らの思うがままになされよ。

あなたの義こそ神の大義であることで十分。

あなたの両の腕のみか それを護持するに十分な

リシュリユーの深謀遠慮があるのだから。

.....

時間には打ち克てませぬ。私はその暴虐に屈しました。

精神のみわずかにその苛酷な仕打ちを免れて

最後の仕事のいくつかのうちに証することができます、  
まだ若々しいその力を。

.....

(PM, p.126)

作品を締めくくる次のリシュリューのことばは、実に簡潔にマレルブの果たした歴史的役割を言い表している。《一体誰がこの任務を、この国家的な重大事業を代行できよう。考えても見たまえ、ボワロベール、彼がひとりで務めていたところに、四十人は必要なのだからね。》四十人からなるその国家的事業体が、彼によって1635年に創設されたアカデミー・フランセーズであることは言うまでもない。

われわれにとっては、この1950年代という時代の政治・文化的諸状況の中で、ポンジュがここまで、詩的言語というよりはむしろ言語（パロール）そのものの根本的な危機感と問題意識とを、強く抱いていたという事実を確認することが大切であろう。その背景は今日のわれわれにとって、一層切実に迫ってきているはずなのだから。

(以下次回)

Décembre 2004.

## 注

1 Francis Ponge, «Malherbe d'un seul bloc à peine dégrossi». このテキストについての考察は、拙論「フランシス・ポンジュ研究 "Pour un Malherbe" を読む (II)」金沢大学文学部論集、言語・文学篇、第21号 (2001年) を参照されたい。

2 ひとつは«Grands écrivains de la France», L.Lalanne(éd.), Hachette, 1862-1869.他は«Société des textes français modernes», J.Lavaud(éd.), Droz, 1936-1937, 2 vols.である。Cf. PL, tome II, p.1453-1454.

3 Malherbe, *OEuvres*, édition présentée, établie et annotée par Antoine Adam, (Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1971.)

4 この点については、前掲書の年譜にも一切記述がない。マレルブがプロヴァンス (エクス) とノルマンディ (カン) の間を往き来する期間は 1577 年から 1605 年まで。宗教戦争はアンリ三世の治世 (1574-1589) のことだから、おそらく二、三十歳代を過ごしたエクスでの文芸仲間の誰彼の証言であろう。

5 PL, tome II, p.1479.

6 この詩篇の出典をポンジュは明示していないが、IL PLAINT LA CAPTIVITÉ DE SA MAÎTRESSE Pour Alcandre の第1節。Malherbe, *OEuvre*, op.cit., p.96.

7 テキストIVについてのわれわれの前稿を参照されたい。